

## 神の実体は誰にも知り得ないと断言している聖句について

「イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。

すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。」(マタイ 11:25-27 新共同訳)

同じ内容のルカからの引用です。

「子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」(ルカ 10:22)

この聖句をそのままに受け取るとすると、まず、「み父」については、キリストご自身は当然として、それに加え、キリストが知らせ（理解させ）ても良いと思われた人だけは、「父」を知ることができる。ということです。

「父」を知る得るかどうかは、「全てを任せられた」み子イエス・キリストに全く依存していると言うことが解ります。

と言う事は、キリストを受け入れなかった（認めない）ユダヤ人は、いつの時代であっても、誰も神（父）を知らないということになります。

しかし、「み子」については「父」以外に、その本来の姿というか、実体については誰も知らないということです。

何と「誰も見たことがない」み父以上に、人間となって人々の間に生活された、み子こそ、よりミステリアスな存在だと言うことです。

「父」よりも「子」を知る方が難しい。と言うより、「子」を知り得る人間はいないと言う事になります。

これは、「十分によく理解することができない」というニュアンスではなく、原語でも端的に「父以外に、誰も子を知らない」と記されています。

しかし、書簡には、「キリストの愛」やその深い思いやりなどに関する表現が多数見られ、弟子たちはみな、キリストを深く知り、よく理解していたと思わせる記述は少なくありません。

「キリストの愛がわたしたちを駆り立てている。…」(コリント第二 5:14)

「人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。」(エフェソス 3:19)

これらの記述から、キリストの深い愛や、その人格的な特性などはひしひしと感じとれるとしても、み子が実際「どういう方なのか」、と言う、その正体、実体については、今のところ誰も知り得ていない。ということでしょう。

にも関わらず例えば、ある説明によれば、「三位一体の神とは、父、子、聖霊という三つの位格（ペルソナ）を持ちながら唯一の本性（ナトゥーラ）を持つ神、ということですよ。」と断言しています。

そして、最初聞いて不可解に思えても、「神学の勉強が進むにつれて、換言すれば神の全貌が見えるようになると、その神秘は言葉では完璧に表現できないが納得のできる教えであると分かって」来る。と解説しています。

キリストご自身の言葉は、「子がどういう者であるかを知る者はない」。と断言されていますので、「神学の勉強」などによって「神の全貌が見えるようになる」ことはあり得ないと言えます。「・・・こう考えられるが、「誰も知らない」と言われている故に、今のところ、神とは誰か、（何か）と言う事を断言できる聖書的な根拠がありません。」と言うのが、本来あるべき「神学」の姿勢ではないでしょうか。

「（聖書に）書かれていることを越えない。」（コリント第 I 4:6）ことを学ぶ必要があるでしょう。

「誰も子を知らない」というキリストご自身のこの言葉に言及した箇所は調べた限りでは、ここで引用したもの以外、聖書中の他の部分には見当たりません。

時間、年月の経過と共に「み子」を知る時が来ると言う明確な形での示唆もありません。

あるとすれば、クリスチャンが天に召された後、と言う事しかないでしょう。

実際、キリストに「父」を知らせてもらえた人だけが本物のクリスチャンとなり、天で、神とキリストに直面することにより、その時始めて、「父」と「子」の実体を「知る」ことができるでしょう。

ですからこれはキリストの愛や思いを知ると言う事とは別の次元の話のようです。

「み子」の本質的な実体については、未だ謎のままと言えそうです。

少なくとも、キリストご自身の素性、本性、正体を知った、あるいは理解したつもりになっても、それはどこまでいっても勘違いの域を出ない程度でしかない、と言う事を思いに留めておく必要があるのではないのでしょうか。

ところで、なぜ？ どうして、「誰も知らない」、で済まされたままなのでしょう。せめて、み

父の場合と同じくらい、み子についても、「知らせても良い」と思う人にだけは、明らかにします。と言われなかったのでしょうか。

せもてもう少しくらい、情報が与えられていたら、他ならぬ「神の实体」について、こんなに神学上の論争と困惑を極めるような事態にはならなかったでしょうし、ユダヤ人たちも、もっと大勢の人がキリストを認めたかも知れません。

しかし、キリストが神であることや、父との関係などについての聖書の情報は極めて乏しく、曖昧なままになっています。

それは、恐らく意図的にそうされたのでしょうか。

真の信仰が試される事になるのでしょうか。

それが、明らかにされなかったのは、「必要では無い」と判断されたからに違いありません。み子とみ父との関係に関する詳細な情報や、その神性に関する情報が、本当に必要であったなら、それを明確に示されたはずです。

「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」(ローマ 8:32)

しかし、これは、神を模索することが不必要、無意味ということでは、決してないでしょう。なぜなら、神は人間に、ご自分を「求め」「模索し」「見いだす」ことを望んでおられることは明らかだからです。

「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。

これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるよということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。」(使徒 17:26,27)

では、どうなのでしょう。「子がどういう者であるかを知る者はない」と言われ、誰も知り得ないのに、どのように神を探しもとめ、見いだすことができるのでしょうか？

これらは矛盾しているのでしょうか。

わたしはそうは思いません。

「神を求め、見いだす」とことと、神の实体(神学上の難解な論文や論争)を極めようと試みることは、全く異なることであることに気付くべきです。

「神を求め、見いだす」とは、その実体がどうこうとかではなく、純粹に、その言葉や、人々への深い愛情や思い、将来の約束そのものに注意を払い、呼応して、人も自分の愛と思いを素直に傾けて、信仰を働かせてゆくことこそ、「神を見いだす」ことであり、そうした人々にとって、神は遠く離れておられるわけではない。ということでしょう。

「律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。」(ガラテヤ 5:14,15)

まさに、これこそ、今取り上げている「誰もみ子については知らない」と語られるきっかけとなった、その直前の言葉にそれを見いだします。

「イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。」(マタイ 11:25)

み父の御心に適う、「知恵ある者や賢い者には隠し」ておくべき事柄の中に「み子がどういう方なのか」という正体についての情報も含まれていたということでしょう。

むしろ、そうしたことを問題にして論争の種にしてしまうような、聖書学者たちの神学こそ、不毛な努力であることを、キリストはこの話しの中で諭しておられるに違いありません。